
仰せのままに、御主人様

空色小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仰せのままに、御主人様

【Nコード】

N7972D

【作者名】

空色小鳥

【あらすじ】

商家を営んでいた両親の突然の死により、残されたのは一人娘のマデラと唯一の使用人ヴェネフ。世間知らずな『お嬢様』は、国に没収されてしまった店を取り戻すと言い出すけれど…？『天上の国』と同じ世界を舞台にした凸凹主従の商人FT。

Prologue

ティガル「フェンデという名を知る者は少ない。

だがその名を知らぬとも、『貿易王』ガロ・マーシャという通り名は、彼が死してなお、今の地上で知らぬ者はいないだろう。

彼は全ての海を制覇し、一代で一国の王すら凌ぐしの財を為したという武勇伝中の人である。

+ + +

「だからね、このまま終わったらいけないと思うの」

何をどうしたら『だからね』に繋がるのかわからない流れで、彼の仕える『お嬢様』は唐突に言い放った。

脈絡のない会話は十代の少女にとってはお手の物だろうが、来年二十を迎える予定の彼には理解困難である。

仕方なく、彼　ヴェネフ「ニル」イ「アロドットは口を開いた。

「お嬢様、私には今のこの状況でその一言が出る理由がわかりません」

場所は船着場だった。

荒くれた海の男達かつぽが闊歩し、強い潮の香りに満ちた外海への玄関口である。ざざーんと打ち寄せる波の音が、向き合う二人の間を通り過ぎては消えて行く。

彼等はどちらも白い服を身につけていた。

飾り気のないそれは、喪に服している事を示す。まさについ先程、二人は葬儀を終えてきたばかりだった。

「いやね、わからないの？　ヴェネフ」

葬儀の為に結い上げていた銅色あかがねの巻きの強い髪をばさりと解きながら、お嬢様　マデーラ「フェンデは形の良い唇を拗すねたよう

に尖^{とが}らせた。

「父様も母様も死んでしまつて、わたし達、下手したら路頭に迷うのよ」

「そうですね」

それは間違いようのない事実だつた。

三日前の嵐で、商談の為に外海に出ていたマデーラの両親は、乗っていた船ごと荒波に飲まれて海の藻屑^{もくす}と化したのだ。

海で商人が死んだ場合、大抵は死体が上がらない事を理由に、葬儀は海の上　水葬で執り行われる。実に商人らしいとも言える、合理的な方法である。

マデーラには身近に両親以外の血縁はなかったし、商人とは言つてもほとんど身内だけで回していたような零細^{れいさい}振りで、正式な使用人はヴェネフ唯一人という有様だ。

母方の親戚はいないものの、父方ならば幾人かはいるはずなのだが、それぞれが大陸中に散つていて、今では何処にいるのかも生きているのかさえ定かではないらしい。

店の実質的な権利者であつた両親を共に失い、頼れる血縁者もない状況で、現在十三歳で成人に満たないマデーラではその後を継ぐ事も維持も出来ない。

僅かばかりに残された財産も、これから増やせなければ減る一方。明日の食事にも困るようになる日は近い。

「『だから』、終われないつて言つてるんじゃない」
言わんとする所は理解出来たが、重要な部分を端折^{はしり}られてはわかりたくてもわかるはずがない。

心の底から突つ込みたかつたが、ヴェネフは良く出来た使用人だつたので我慢した。

「わたしは『貿易王』の孫よ。こんな所で路頭に迷う訳には行かないわ!」

その宣言は実に雄々しかったが、具体的な方策があるとは思えない状況ではただの大口である。

マデーラの言う通り、元を辿れば確かにマデーラは世界に名を響かせた『貿易王』ティガルの孫にあたる。

が、かつて一国の王すら凌ぐと言われた財はすでに過去のもので、ティガルの子供達は凡人の域を出なかった。

否、彼等を弁護するならば、ティガルの才覚が人並み外れていたのだ。

ティガルの死後、その財は子供達に分配されたが、その後世界全土を巻き込む戦争が起こり、マデーラの父が受け継いだ物の大半は灰と化したり、戦火を避けての逃亡の間に散り散りになってしまった。

戦いが何とか平定した今も、落ち着いた先であるこの国は、現王と前王弟の間で王位継承を巡って何かときな臭い話題が尽きない。戦乱を生き延び、小さくとも店が残っただけでも幸いなのだ。もつとも、近い内にその店の権利は国に没収されてしまう事が決定しているけれども。

「それでお嬢様。これからどうするつもりですか？」

尋ねると、琥珀こはくの瞳がヴェネフの浅黒い顔を見上げた。釣り目気味だが年の割りに整った顔が、にっこりと不吉な笑顔を浮かべる。

マデーラがこういう『いい笑顔』を浮かべている時は、大抵ろくな事を考えていない。

今からでも遅くはない、解雇を求めるべきかも。

そんな事をヴェネフが考えている事に気付いているのかいないのか、マデーラはしつかとヴェネフの服の裾すそを掴んでから言った。

「決まっているわ、わたし達の手で店を取り戻すのよ！」

わたし達、の中にヴェネフは当然のように含まれている。

マデーラの手元に残った物は、身の回りの品と両親の残した僅かばかりの遺産、そしてたった一人の使用人であるヴェネフ。

無謀にして果敢な少女は、それだけで国に没収される店を取り戻そうと言うのだ。

未成年である事は時間が解決してくれるが、一度国のものとなっ

てしまった権利を再び取り戻すのは言う程簡単な事ではない。

内乱の気配漂う今、少しでも資金を欲する国はすぐに権利を売り出すだろうし、その場合は国から買い取った人間から、店と土地の権利を買い取り、さらに商人として商う許可を国から得なければならぬのだ。

すなわち、物を言うのは『金』である。

「お嬢様、自分がどれだけ無茶を言っているかわかってます？」

無駄だとわかりつつも確認すると、マデーラは当然とばかりに発展途上の胸を張る。

「人間、目標が高いほど燃えるわよね！」

絶対にわかってない。

だがヴェネフは良く出来た使用人の上に分別ある大人だったので、世間知らずの子供の無謀さを賢^{さか}しらに指摘する事はしなかった。

彼の黒い瞳は諦めたように頭一つは小さい主人を見下ろした。

そう、本来の主人であるマデーラの父が亡くなった今、彼の主人はこの少女なのだ。

海の照り返しを受けてきらきらと輝く期待に満ちた瞳を前に、他に何が言えただろう？

「…仰せのままに、御主人様^{マ・リスタ}」

それが『貿易王』の孫・マデーラと、その使用人ヴェネフの新生活の始まりだった。

世界は三つの大陸と、一つの天空大陸から成り立っている。地上にある三つの大陸を、現在支配しているのは四つの国。

もっとも大きな中央大陸の北にスタラ、南にレサイア。その北東にある大陸にベネデイス、最も南にある大陸にエラシッド。

店を国に没収されたマデーラ達が現在暮らしているのは、その内のスタラと呼ばれる国にある小さな港町、ミオツサだ。

縦に長い中央大陸の北半分を支配しているので、北方は冬になると極寒の地だが、南のレサイア寄りにあるミオツサは冬でも多少は過ごしやすい。

「過ごしやすいが、『寒くない』とは同意ではないとしみじみヴェネフは思う。

「ヴェネフ、何なのその格好？」

着込めるだけ着込んだヴェネフの姿に、マデーラは呆れた声をあげる。そう言うマデーラは少し厚めの生地で仕立てたダークグリーンの普段着一枚だ。

一応汚れないように、服の上にエプロンをかけているが、防寒に役立つ訳もなく、いくら室内でもその薄着は見ている方が寒い。

「…お許しを。寒さだけは本当に弱いんです」

その言葉に嘘はない。

「ヴェネフはエラシアンだものね。でも、やっぱりその格好は変よ？」

毎年の事なのでマデーラもわかってはいるのだろうが、つい言うたくなるらしい。

ヴェネフの生まれは南方大陸　現在、エラシッドによって統治されている場所だ。

黒い髪と瞳、浅黒い肌の彼等は非常に勤勉で身体能力が高く、物覚えも良いとされ、昔から世界各地で使用人として重用されてきた

歴史がある。

フェンデ家に彼が仕えるようになったのも、すでに亡くなった彼の父が『貿易王』に金銭では返せない恩があり、息子へ奉公で返せと遺言したからだ。

多分素直にその遺言を聞く必要はなかっただろうが、当時、今のマデーラよりも幼かったヴェネフには他に行き場がなかった。

口約束でしかない遺言だけを胸に、一人やって来たヴェネフをマデーラの父、ユーデインは暖かく迎えてくれ　現在に至る。

（…あの頃は素直でかわいらしかったのに、どうしてこんなにたくましくなったのですかね……？）

すでに店は国に下調べという名目で押さえられてしまった為、急遽借りた小さな家の床を箒で掃きながら、ヴェネフは心の中で嘆息する。月日というものは残酷だ。

ヴェネフが使用人となった時、マデーラは五歳。

兄弟がいなかったせいかすぐに懐き、それなりに多忙な両親に代わって、ヴェネフはずっと子守役だった。

そんな彼の後を追いかけていた少女が、今では彼の主人なのだ。

世の不条理を思わずにはいられない。

「じゃあ、ヴェネフは残りの掃除と留守番をお願いね」

先程まで危なっかしい手つきでヴェネフ同様に掃除をしてはずなのに、マデーラはいつの間にか外套を片手に出かける準備を整えて戸口に立っている。

この寒い中、わざわざ外に出かける気はなかったが、そうですかと受け入れられる話ではない。我に返ったヴェネフは慌てた。

「ど、何処へ行く気ですか、お嬢様！！」

「何処って決まっていますでしょ。そろそろお昼よ？」

言われて見れば確かに、そろそろ昼食時だ。

葬儀は朝早かったし、そのままこの家に来て掃除をしていたので、育ち盛りのマデーラが空腹を訴えるのも当然だろう。

だがしかし、たとえ主人だろうと簡単に財布を任せる訳には行か

ない。

ただでさえ今までろくに買出しなどした事がないのだ。値切るなんて芸当は期待出来ない。

「買出しでしたら私が行きます。お嬢様では足元を見られるのがオチです」

「失礼ね！」

ぶう、と頬を不満気に膨らませる様子は小さな頃と変わらない。だが、その仕草を微笑ましく感じられるような状況ではなかった。

ここで主張しておかねば、本当に二人揃って路頭に迷う。

「失礼と言つか、事実でしょう。お嬢様は接客の経験はあっても、金銭の取り扱いはまだ許されていなかったじゃないですか」

痛い所を突かれたのか、マデーラはぐつと言葉に詰まる。けれどその程度で押し負けるような性格ではなかった。

「父様も母様も心配のし過ぎだったのよ。わたし、それでも算術は得意だし、お金の計算を間違うほどばかりじゃないわ！」

「…旦那様と奥様が心配したのはそこじゃありませんよ」

マデーラが同じ年頃の少女より頭の回転が良く、算術が得意というのは確かだが、それだけで商売が出来れば何の苦労もない。

「まずは人を見る目と、駆け引きを身につけさせようとなさっていません。商売の基本ですよ」

商人はお人好しでは商売にならない。

顧客を満足させながらも、自分に益をどれだけ得るかが重要であり、商人としての腕の見せ所だ。

それにはまず多くの人に接し、様々な人々に適した対応を自分なりに見つけなければならぬ、とはマデーラの父・ユーデインの口癖だった。

商人としての才覚は父であるティガルの足元に及ばずとも、その息子であるユーデインはやはり根っからの商人だったのだ。

マデーラは良くも悪くも真っ直ぐだ。

裏がないから人の信用を勝ち取りやすいが、同時に相手の裏を読

む事には長けていない。つまり、騙されやすいのだ。

これでは子供の頃のみならず、一人前の『商人』になるまでお守り役をする羽目になりそうである。

亡きユーディンが、マデーラに劣らない教育を使用人のはずのヴェネフに対しても施したのは、もしかするとこんな状況を見越してのものだったのだろうか。

ふとそんな事を勘ぐってしまい、ヴェネフは少し鬱に入った。

「ねえ、ヴェネフ」

ヴェネフの言葉に思う所があったのか、考え込んでいたマデーラが口を開いた。

何かと思う前に、その手が動いてヴェネフの手にあった箸を取り上げてしまう。

「お嬢様？」

「確かにわたしは商人に必要な駆け引きとかには慣れてないわ。でもお腹が空いたの。この家にはまだ食べ物なんて何も置いてないんだから、買って来ないとならないと思うのよ」

「それはそうですか……」

「でしょう？」

マデーラの言葉も間違っではないが、やはりマデーラに買い物任せるのは少々不安だ。

その不安を見透かしたように、マデーラは続けた。

「だったらヴェネフも一緒に出かけましようよ。それなら安心ですよ？」

そして止めとばかりににっこりと笑う。

ヴェネフはその顔を呆然と見つめ、次に窓の外の下にも雪が降りそうな寒空に目を向け、再びマデーラに顔を戻した。

ただでさえ冬の港は凍えるように寒く、流石に喪服の上にぐるぐる着込む訳にも行かずにひたすら耐えた後だ。

ようやく人心地ついたばかりと言うのに、また寒空の下に出かけると言うのか。なんという無体な仕打ちだ。血の通った人間の行い

とはとても思えない。

けれどヴェネフは良く出来た使用人の上に分別ある大人で、ついでに忍耐強かったので幼い主人に逆らうような事は出来なかった。

「…仰せのままに、御主人様^{マ・リスタ}」

悲壮な覚悟で承諾する彼に、マデーラは満足したように頷き、実際に楽しそうな様子で彼の手を取って扉を開く。

途端に容赦なく吹き付ける寒風に彼の目で涙が光ったが、そんな彼に同情してくれる人は当然ながら誰もいなかった。

今までほとんど来た事がなかった市場は、マデラにとっては物珍しいものばかりだったらしい。

「ねえねえ、あれは何!?」

「今すれ違った人、見た事もない服を着ていたわ。何処の国の人かしら?」

「あの青い果物、食べられるの?」

…などなど。

好奇心を剥き出しにして、僅かな距離を進む間に矢継ぎ早に質問が飛んで来る。

「あれは薬草用の石臼いしうすですよ」

「あの服装は確か何処かの山岳部族のものだったと思います」

「あれはあのまま食べると恐ろしく苦いです。加工しないと食べられません」

その質問に律儀に答えつつ、ヴェネフは周囲を見回した。

流石に昼時は人が多い。

二人のように昼食を買いに来た人間も多いだろうが、店の性質によつては昼前に閉めてしまう事もある為、今時分が一番混み合う。

あまり人が多いとゆっくり見ても回れないし、特に食料品関係の店はこの時間は大盛況だ。場合によっては交渉などもろくに出来ない可能性がある。

その事もあって、もう少し人が落ち着く遅い時間に来るつもりだったのだが、ここまで来てしまったら、とっとと用事を片付けてこんな寒い場所とはおさらばするに限る。

周囲の人々の倍は着込んで見るからに着膨れているヴェネフを、時折何事かと視線を向けてくる人間もたまにいるが、すでにそうした目には慣れてしまった。

だが、ふとそれとは微妙に違う視線を感じて傍らを見ると、しっかりヴェネフの服の裾を握った状態でマデーラがじつと彼を見上げている。

「…どうしました、お嬢様」

また何か気になるものを見つけたのかと思いきや、マデーラは彼から視線を反らさずに口を開いた。

「ヴェネフは物知りね。何でそんなにいろいろ知ってるの？」

少しむくれたような言葉に、思わず苦笑する。

「物知りなんて言える程度の知識ではありませんよ。この国に来てからはこの街からほとんど出ていませんね。…市場には旦那様の御供でよく来ていましたし、旦那様や奥様から頼まれて買出しもたまにやっていましたから」

はつきり言ってしまうえば、マデーラが世間知らずなだけである。

普通の一般庶民なら市場で買い物など子供の頃に普通にやっていても不思議ではないばかりか、農家の生まれだったりすれば親の手伝いで店頭に立っていたりする。

流石に面と向かってそんな事は言えないが、自分でもそう感じたのか、マデーラの表情が目に見えて暗くなる。

もしかして落ち込んでしまったのだろうか。

少し心配になったが、よもやこの程度で落ち込むとは思わなかったので、どう慰めればいいやらわからない。思春期の女の子は複雑怪奇だ。

やがてマデーラは小さくため息をつく、ぽつりと呟いた。

「いいもの。わたしにはまだこれからがあるわ」

「…??？」

相変わらず重要な部分が端折はしよられている気がする。

だが、取りあえず浮上してくれるのならありがたい。ヴェネフは

これ幸いと、裾を掴むマデーラの手を取った。

長身の部類に入るヴェネフとまだ成長期に入っただけのマデーラでは、身長差がある為、裾を掴まれると後ろに引つ張られる形になつて歩きにくい。

何より引つ張られた部分に風が入ると寒さ倍増だ。先程からどうにかして改善出来ないだろうかと思つていたのだ。

かと言つて、この人ごみではぐれられても困る。そう思つての行為だったのだが、何故かマデーラは驚いたように目を丸くした。

「ほら、お嬢様。ここですつと立っていたら通行人の邪魔になりますよ？ 取りあえず動きましょう」

「え、あ…そ、そうね」

ヴェネフの言葉に対する返事も何処か動揺している…ような？

ハテ、我ながら名案だと思つたのだが、何か変な事を言つただろうか。心の中で首を傾げながら、ヴェネフはマデーラの手を引きながら先に立つて歩き始めた。

手を引かれるままにマデーラは着いて来るが、先程までぼんぼん飛んできていた質問もなりを潜めてしまった。…何だか不気味だ。

歩きながらちらりを視線を向けると、マデーラは何処となく頬を赤らめ、恥ずかしそうな顔をしていた。

(…はっ！)

その様子でヴェネフは閃く。

(そうか、子供扱いされたと思つたのか！)

確かに今の状況は、大人が子供の手を引いているように見える。とても使用人が主人を案内している図には見えないだろう。

その事を差し引いても、子供扱いを嫌がる年頃なのだろうし、手を引かれる事を恥ずかしいと思つても不思議ではない。

思い返せば、今までマデーラに手を引かれる事はあつても、その逆はほとんどなかった。…その必要がなかったとも言つが。

まさか今更、手を繋ぐ行為自体を恥ずかしがる事もないだろう。新居から引つ張り出された時ですら、マデーラは彼の手を躊躇なく

掴んだのだから。

ようやく納得したヴェネフだったが、だからと言って手を離す訳にも行かず、取りあえず目ぼしい店まではそのままでいる事にした。「あー……、お嬢様、昼食には何をお召し上がりになりたいですか？　そう言えばもう少し先に、旦那様もお好きだった腸詰の店がありますね。行ってみますか？」

何となく落ち着けずに話題を振ると、マデーラは先程までの恥じらいは何処へやら、何故か少し怒ったような目で睨んできた。

「お嬢様？」

ハテ、腸詰はお気に召さなかったのだろうか。口持ちもするし、何より値段も手頃なので個人的にはお勧めなのだが。

マデーラの反応にヴェネフは再び心の中で首を傾げた。

その店の主人はヴェネフと同じエラシアンで、作る腸詰も南方大陸風である。

他の店より少々香辛料がきつめに作られているそれを、確かマデーラも嫌いではなかったはずだ。

何が気に食わないのだろうと不思議がるヴェネフの前に、マデーラはようやく口を開いた。

「期待したわたしがばかだったわ……」

しかし、ぼそりと呟かれた言葉は、人々のざわめきに紛れて聞き取れなかった。

「はい？　今、何か？」

「べ、別に！　いいわよ、そこで……お腹も空いたし……」

「ではそれで、御主人様」
マ・リスタ

何だか自棄っぱちにも聞こえる返答に益々困惑しつつも、ヴェネフは頷いた。

忍耐強さにはそれなりに自信があるが、正直、この寒風に長時間吹かれているのは辛い。

新居の掃除もまだ途中だし、今日中にやるべき事はいくつもあるのだ。こんな所で無駄に時間を費やすのも勿体ない事だろう。

取りあえず当分必要そうな物を頭の中で思い浮かべ、これから立ち寄る店を決める。

折角の機会だから、今後の事も考えてマデーラに交渉させてみてもいいかもしれない。何事も経験は大事だ。

そんな考えに没頭するヴェネフを、マデーラは呆れたように見上げ、小さく吐息を漏らしたが、彼はその事にまったく気付いてはいなかった。

「残念ながら、不合格ですね」

ヴェネフの率直な感想に、マデーラがむっとした様子で顔を上げた。

「何よ、ちゃんと値引きしてもらえたじゃない」

「確かに値引きはして貰えたかもしれませんがね……」

不満を隠さないマデーラに反論しつつ、ヴェネフはじつとマデーラを見つめる。いつもなら負けじとさらに見返すマデーラだが、その視線が何か疚しい事でもあるかのように僅かに泳いだ。

かつてユーディンも好きだった腸詰に、常備可能な野菜と調味料を必要最小限　その予定だったのに、マデーラの腕の中には紙袋に入った予定外の物体があつた。

つややかな光を放つ赤い果物。その名は林檎^{りんご}。

「……やあ、お嬢ちゃん可愛いねー。うちの林檎もほら、恥ずかしがつてこんなに赤いよー」……でしたか？」

「！」

ぼそりと棒読みでヴェネフが口にした言葉に、マデーラの肩がびくりと跳ねた。

「だ、ただだ、だって！　美味しそうだったんだもの……！」

慌てた様子で必死に言い募るものの、その姿に今更ほだされるヴェネフではない。

「はは、何も不味いとは申してませんよ？　見事な冬林檎です。きつととても美味しいでしょうね。……ですが、果物というのはそもそも日持ちはしないですし、嗜好品ですから基本的に高価です。少々値引きしてもらった所で、その一袋でこちらの野菜が倍買えますよ？」

「うつつ……！」

言葉による容赦ない追求に、マデーラはもはやそれ以上の言葉は

出なくなつたようだった。

やれやれ、とため息をつきながらも、ヴェネフは頭の中で素早く計算する。

（ 若干予定外の出費ですが…林檎なら食材ですし、まあ、良しとしますか。これもお嬢様の『学習費』と思えば安いものですかね）

果物売りの呼び込みに引つかかっている事に、敢えて気付かなかつた振りをしていた事は秘密である。

長年の付き合いだ。マデーラが口で言うより、少々痛い目に遭つた方が覚えが良いのはすでに知っている。

がつくりと落ち込んだマデーラを他所に、ヴェネフはこっそり林檎の質を確かめた。

小振りだが色も形も申し分ない。寒風によって届く香気は甘く、程よく熟している事がうかがえる。

（…ふむ、いい林檎だ）

ちなみに林檎はヴェネフも好物である。マデーラの手前、真面目くさつた表情を保っていたものの、つつい口元が緩んでしまう。

（品を見る目に関しては、血は争えないと言ふべきですね）

幼少時にはまだかろうじてティガルの残した品も残っていたそうだし、毎日品物に囲まれて育つた身だ。『良い物』に対する目が無自覚の内に養われたのだらう。

腸詰は同郷のよしみと、店主がお得意様だったユーディンの訃報を聞いていた事でかなり安く売つて貰えた。

野菜もいくつかまとめ買いする事で多少は値引いて貰う事に成功したし、後は調味料等だけである。

林檎分の出費を考えても、実際は赤字にはなつておらず黒字で収まっているのだが　　ここは将来を考えて、あえて愛の鞭だ。

「…お嬢様、次はやってみますか？」

しゅんとうなだれているマデーラにそう持ちかけると、その顔がぱつと持ち上がった。

「つ、次つて」

「もちろん、交渉ですよ」

ヴェネフの言葉にマデーラの目がきらりと光った。

「やるわ！」

予想以上のやる気に、おやと驚く。

余程、先程の『不合格』という言葉が口惜しかったのだろうか。
プライドの高いマデーラの事だから不思議ではないが。

「後は何を買うの？」

「そうですね…塩は産地で基本価格がほぼ決まっていますし、交渉するならそれ以外の物になるでしょうね」

「それ以外…香辛料とか？」

「ええ、お嬢様が必要なら茶葉などでもいいですが」
「……」

香辛料も茶葉も、どちらも果物と変わらない嗜好品で、流通が下がる冬場はこの店も価格が高めに設定してある。

値引き交渉としては果物より難易度は高い。それなりに家業を手伝っていたマデーラにもそれはわかつているだろう。

マデーラは少し考え込んだ。考え込み　やがて再び持ち上がった目には、何かを思いついた輝きが宿っていた。

「決めたわ、ヴェネフ」

「では何に？」

「茶葉にするわ。香辛料ほど専門的な知識がいらないもの」

マデーラの言葉に間違いはなく、その選択は正しい。

香辛料は中央大陸の中央より以南でしか採れない植物が主だ。すなわち、ほぼ全てが陸か海を経由して輸入されてきた物だと言える。元々南方大陸の出身であるヴェネフならばさておき、スタラからほとんど出た事のないマデーラではその良し悪しを判断するのは難しいだろう。

だが、茶葉ならこのスタラでも栽培されているし、比較的日常的に口にする物だ。それに、元々マデーラの家でも取り扱っていた物

でもある。

「ならば、お手並み拝見致しましょう」

ヴェネフの言葉に、マデーラは不敵に微笑んだ。この様子だと、何か勝算でもあるのだろうか。

目的が決まり共に茶葉の卸商に向かいながら、ヴェネフはそれにしても、と思う。

（何か企んだような顔が似合うというのは、女の子としてどうなんですか…）

よく言えば小悪魔的なかもしれないが、それなりに付き合いの長い身には魅力的には映らない。何しろ、大抵の場合そんな顔をされた後に困った事になるのはヴェネフだったのだ。

マデーラはまだ子供の分類を受ける年齢だが、すぐに年頃になるだろう。その時に困った事にならなければいいが。

（…変な虫がつかないならそれに越した事はないと思いますが、まったくつかないというのも……）

マデーラの両親が亡くなった今、代りにマデーラの幸せを見届けるのは己の役目だとヴェネフは密かに思っていた。

便宜上、関係が雇用主と使用人なので表立って『保護者』を気取るつもりはない。

だが、今まで『兄』代わりだった者として、マデーラ個人の幸せの為ならば可能な限りの助力を惜しまない心構えだ。

もつとも正直な所、今のマデーラを見ていて、その花嫁姿など想像も出来ないのだが。

そんな事を考えているなど思いもしてないであろうマデーラは、黙って僅か後ろを着いて来る。

ヴェネフにとって理想の女性像は今は亡きマデーラの母であり、ユーデインの妻　リエナだ。

ヴェネフの目から見てリエナは、良妻賢母でしかも優しげな美貌を持つ、非の打ち所のない女性だった。母代わりの存在でもあったせいだろうが、その影響は大きい。

その血を引いているはずなのだが、マデーラは顔立ちこそリエナに似たものの、性格は見事に正反対だ。ユーディンも穏やかな物腰の人だったし、一体誰に似たのだろうかと思つた。

ユーディン曰く、マデーラは祖父である『貿易王』に気性が似ていると言う話だが、ヴェネフがフェンデ家に来た時点ですでに故人となっていた人なので、真偽のほどはわからない。

似ているからと言って、同じように伝説に残るような商人になれる訳もないし、なれたとしても、女性としてそれは幸せなのだろうかと思つた。

ヴェネフとしてはもう少し女性らしい奥ゆかしさを身に付けて、人並みの幸せを見つけて欲しいのだが。

ちらりとマデーラに視線を落とし、また好奇心を隠さずに物珍しげに周囲を眺めている姿に心の中でため息を着く。

普通こついお年頃の女の子は、商売とか市場などではなく、恋とかお洒落とかに興味を持つものじゃないのか。

だが、思い返してもマデーラがそうしたものになつていた事は一度もなかった気がする。

(…無理かも)

あの母を身近にして今まで身に着いてないものが、手本もないのにこれから身に着くとは到底思えず、ヴェネフはあっさりと投げた。世界は広い。多少がさつでも、家事も満足に出来なくても、女だてらに商人を志していようと構わないと言える豪気な男が何処かに一人くらいはいるだろう。

ヴェネフはよく出来た使用人であるものの、自分に関する事は人並み外れて鈍感だったので、当然のようにその『一人』に自身を含まなかった。

そのまま茶葉の卸商の元へ行くのかと思いきや、マデーラの主張により先に塩や砂糖を買う事になった。

二人分なので多量ではないのだが、嵩張るしそれなりに重さがある為、出来れば最後に立ち寄りたかったのだが 理由があるのだと言われれば使用人が主人に逆らえるはずもない。

荷物を抱えてようやく辿り着いた卸商の引き戸の中に入ると、しゅんしゅんと湯が沸く音と共に、仄かな温もりと何処か心安らぐ芳香に包まれた。

今まではほとんどが露店だっただけに、その温もりに思わずため息が出そうになる。

そこに人の訪れに気付いたのか、奥にいた店の主人が顔を出した。「寒い所いらつしやい。おや、もしかして…フェンデの嬢ちゃんかい？」

顔見知りだったのかと、ヴェネフが意外に思っている横で、マデーラはにっこりと微笑む。

「こんにちは、アルポイさん」

「いやあ、大きくなったねえ。びっくりしたよ。…こっちの兄さんは？」

「これはヴェネフよ。うちの使用人なの」

「…ああ！ あのだ！」

何だか物扱いされた上に、知らない人に『あのだ』と言われてしまった。

おそらくマデーラ経由で何か話が伝わっているようだが、一体何を吹き込まれているのか知るのが怖い。

「…お嬢様、お知り合いなんですか？」

市場にはほとんど来た事がなかったはずのマデーラの意外な人脈に、驚き半分怪訝さ半分で尋ねれば、マデーラは澄ました顔で含み

笑いする。

知り合いなのは確かだが、どういう知り合いかは答える気がないらしい。

（…茶葉を選んだのはそういう事だったのか）

確かに顔見知りなら、値引き交渉もしやすいだろう。多少無茶を言っても、相手を怒らせてしまわない程度には親しそうである。

「嬢ちゃん、今日はどうしたんだい？」

密かに心配もしていたヴェネフがほつと胸を撫で下ろしていると、マデーラは茶葉商人　アルポイという名らしい　に歩み寄り、例の何処か企んでいるような笑顔で口を開いた。

「今日はお供じゃなくて客として来たのよ。何か良い茶葉はあるかしら？」

「ほほう。…ああ、じゃあこれはどうかな。最近出回るようになったレサイア産のなんだがね」

（…お供）

その単語に記憶が刺激された。

室内に籠もる、あらゆる産地から集められた茶葉の香り。その香りで何だか気持ちいが安らぐのは、おそらくかつて比較的身近にあるものだったからだろう。

一般家庭ではまだ頻繁には口にする物ではないが、まだマデーラの両親が健在だった頃、日に一度は口にしたものだ。

『お帰りなさい、ヴェネフ。疲れたでしょう？　丁度お茶を淹れた所なのよ。あなたも一緒にどうぞ』

（奥様……）

そう、マデーラの母・リエナの優しい笑顔と共にあった香り。ユーディンの供をしたり、あるいは一人で使いに出て帰ると、リエナがマデーラと共にお茶の用意をして迎えてくれたものだ。

ユーディンとリエナが亡くなって十日にも満たないというのに、

随分長い事口にしていけない気がして、少し切なくなった。

茶の良し悪しは彼にはよくわからないのだが、それでもその時の茶は美味しかったと思う。おそらくもう二度と味わう事はないのだろう。

「そう言えば……」

今まで疑問にも感じていなかったが、茶葉を取り扱いしていながら、ヴェネフがこの卸商に足を運んだ事は一度もなかった。

てつきり、ユーディンが一手に担っているのだらうと思っていたのだが。

（もしかして、奥様が管理なさっていたのか？）

仮にも商家の妻だ。可能性はある。

ヴェネフはユーディンと共に行動する事が多かったので実際の所はわからないが、そうだと仮定すればいろいろと納得出来る。

その買い付けにマデーラがついて行く事もあっただろうし、それならアルポイと顔見知りにもなるだろう。

それにあの茶葉がいいと言った時の何処か勝ち誇った顔。間近で買い付けを見ていたのだとすれば、値引き交渉にも少しは自信があるはずだ。

なるほどそういう事だったのかと一人ヴェネフが納得していると、彼を他所にマデーラと話し込んでいたアルポイが突然悲鳴のような声をあげた。

「そりゃ無茶だよ、嬢ちゃん！」

何事かと目を向けると、頭を抱えたアルポイと小首を傾げたマデーラの姿があった。

「……どうしましたか」

何となく嫌な予感がして、口を挟むとアルポイが困ったような目を向けてきた。

「ええと、ヴェネフ君だったかね。君も言ってくれないか」

「あの、うちのお嬢様が何か……？」

益々嫌な予感が募る中、当のマデーラが唇を尖らせつつ説明する。

「『ベネデイス産の茶葉をいくつか一緒に買うから、レサイア産の方を半額にまけて頂戴』って言ったのよ」

「……ちなみに、そのベネデイス産の茶葉というのは……」
「あれよ」

マデーラが指差したのは、見るからに売れていなさそうな茶葉の袋だった。ただし、値札を見ると量は半分なのにレサイア産の二倍はする代物である。

ヴェネフは頭痛を覚えた。

「……お嬢様、それは無茶です」

「あら、どうして？　なかなか売れない物を買取取る代わりに、値引きしやすい方を値引きしてもらうのって悪くないと思うんだけど」
「だからって半額というのはやり過ぎです！」

茶葉は嗜好品で、日常的に口にするものではない。つまり、売れない時は売れないのだ。卸商とすれば、少しでも利益が出るものをそう簡単に値下げなど出来るはずもないだろう。

「レサイア産は飲みやすく比較的売れやすいのは確かだけど、ベネデイス産と違って知名度が低いから思い切って下げるのも難しいんだよ」

アルポイはヴェネフが味方になった事で安心したのか、幾分落ち着いた様子を取り戻した様子で説明してくれる。

「かと言って、ベネデイス産の茶葉はスタラの人間には扱いが難しいみたいだね。これがもう少し売れるなら、半額は無理だが少しはまけられるんだけどね……」

「そんなに茶葉によって扱いが違うんですか？」

ヴェネフの目にはどちらもさして違いはなさそうに見える。だが、その質問にアルポイとマデーラは同時にとんでもないという顔ををした。

「全然違うよ！」

「違うに決まってるじゃない！」

「そ、そうなんですか……」

「そうだよ。元々、茶の文化はベネデイスが本場だからね。ここに置いてあるものはほんの一部で、実際はこれの数倍はある茶葉を時と場合で配合比率を変えて淹れる物なんだ。当然、金もかかるからそこまでやるのは王侯貴族くらいなものだけでもね」

「レサイアの方はそこまで加工されてないのよ。誰にでも簡単に淹れられるけど、その分味は単調みたい」

アルポイのみならず、マデーラにまで蒔蓄をかまされて、ヴェネフは素直に白旗を揚げた。市場ではあれは何これは何、だったのに今ではまるで立場が逆である。

「わ、わかりました。…あの、ところでお嬢様」

「何よ？」

「扱いが難しい茶葉を買って、その、大丈夫なんですか……？」

正直な話、マデーラが厨房に立つ姿が想像出来ない。おそらくリエナが淹れる横で見ているのだらうが、知識はあっても実際淹れられるかどうかは別問題だらう。

その不安が正直に表情に出ていたのだらう。マデーラの目が釣りあがった。

「失礼ね！ …ああ、そうだわ」

そのまま怒り狂うかと思いきや、唐突にマデーラは何かを思いついたように手を叩いた。

「ねえ、アルポイさん。ベネデイスのお茶が売りやすくなればいいんじゃないでしょうか？」

「へ？ …ああ、そうなれば品質的にベネデイスの方がずっと上だから、買い手も増えると思うが……」

でも、どうやって。

視線で尋ねられたマデーラは、ふふんと胸を反らした。

「本式に淹れようとするから難しいのよ。それ単品で美味しく飲めればいいんだわ」

「し、しかしだね、いろいろ混ぜるから補い合って飲めるものになるんだよ。これだけを普通に淹れると不味くて飲めたものじゃ……」

アルポイが言い募った瞬間、マデーラの瞳が待ってましたとばかりにきらりと光った。ようにヴェネフには見えた。

こういう時、大抵マデーラはろくな事を考えていない。そして案の定、マデーラは挑むように言い放った。

「じゃあ、もしその方法を教えたら安くしてくれる？」

「……」

「……」

しゅんしゅんと、湯が沸く音だけが響いている。

ぎこちない沈黙が漂う狭い店内に、男達だけが取り残されていた。というのも、店内の奥にある住居部にマデーラが籠もり、準備が出来るまで見てはならないと店主のアルポイまでも店内に追いやつたからだ。

「……あ、あの……」

「……なんだね」

「その、済みません……うちのお嬢様が……」

居たたまれずにヴェネフが声をかければ、アルポイは何処か同情するような視線を彼に向けた。

「ああ、気にしないでいいよ。……今日はお客も切れたようだしね」

「そう言っていたけるとありがたいです」

「いやいや。嬢ちゃんがどんな仕掛けをしているのか、実際ちよつと楽しみでもあるしね。やけに自信があるようだつたが……。そういや、最近姿を見かけないが、リエナさんは元気かい？ いつもならそろそろ仕入れに来る頃なんだが」

アルポイの何処か心配そうな言葉に思い出す。そうだ、彼はまだマデーラの両親の訃報を知らないのだ。

「それが、旦那様と奥様は……」

二人の死を知ると、アルポイはさほど大きくはない目を極限にまで見開いた。

「お二人が、亡くなった……だつて？」

「はい、先日海で……」

「そんな……そうか、そうだったのか……」

がつくりと肩を落とす姿からは、心から彼等の死を悼む^{いた}気持ち

伝わってくる。目じりにはうつすらと涙が光っていた。

「…奥様が茶葉の買い付けをなさっていたんですね」

「ああ…ユーディンさんとリエナさんがこの土地に来てからの付き合いだよ。リエナさんが元々ベネデイスの生まれだそうでね…うちが一番茶葉の揃いがいいと、ご贖肩にしてくれたんだ」

「そうだったんですね……」

アルポイの言葉を借りるなら、リエナは茶文化の本場の生まれだったという事だ。

なるほど、それなら茶葉の仕入れを一手に受けるのも当然だとヴェネフは納得した。

日頃何気なく口にしていたあのお茶も、もしかするとこのスタラではとても貴重な、本場仕込みの一杯だったのだ。

「五、六歳くらいまでは嬢ちゃんも買い付けに一緒について来ていてね。一緒に来なくなった時に君の話を聞いたよ」

「え？ 私の、ですか？」

「うん、リエナさんにね。『すっかり懐いてしまって、誘っても来なくなった』って言うってたかな。兄代わりの人が出来て嬉しいんだろって笑っていたよ」

「は、はあ……」

取りあえず初対面で『あの』と言われた理由は判明した。

マデーラが五、六歳なら確かにヴェネフが父の遺言を胸にユーディンの元を訪れた頃だ。マデーラの口から伝わった話ではないという事に安堵あんどしつつ、ふと思う。

…ひよっとしてマデーラの世間知らずは、自分にも原因があるのだろうか。

（いや…そんなまさか……）

心の内で嫌な汗を流していると、アルポイが心配そうに尋ねてきた。

「ところでご両親が亡くなったって事だが、嬢ちゃんに身よりは…？」

「それが…奥様にはどなたもいらっしやらないとの話でした。旦那様のご兄弟はいるようなのですが、音信普通で今何処にいらっしやるか、そもそも生きているのかもわからなくて……」

「そうか…それでもあんなに元氣そうに振舞って……」
ぐすり、とアルポイは涙ぐむ。

おそらくマデーラの前向きな明るさを、悲しみを堪えてのものだと思っただろう。

（…多分違いますが、否定するのも野暮でしょうね）

ヴェネフはよく出来た使用人だったので、あえてアルポイの誤解を解かずにいる事にした。

マデーラが両親の死を悲しんでいない訳ではないと思う。実際、知らせを受けて半日は部屋から出て来なかった。

食事も摂らずに泣き通し泣いて 真っ赤に目を泣き腫らしながらも表に出てきたマデーラは、開口一番にこう言った。

『お腹空いたわ、ヴェネフ』

ヴェネフが慌てて用意した簡単な食事を黙々と食べ、お腹が満ち足りる頃には普段のマデーラになっていた。

おそらく、だが。

マデーラは両親の死を悲しみ続けるよりも、自分がまず生きる事を選んだのではないかと思う。

ヴェネフが恩人である彼等の死をただ嘆くより、一人残されたマデーラを支える為、『使用人』としての自分を維持する事を選んだように。

流れるに何処となく、しんみりとした空気が流れた。

『両親の突然の死の前に、涙を堪えて明るく振舞う幼い少女』という図式は、あまりにも健気過ぎてマデーラには似合わない。

何となく騙しているような居たたまれない気持ちになり、ヴェネフは話題を探した。

「あの…私は茶葉に関しては知識不足なのですが、ベネデイス産の茶葉とは、それほど飲みづらいものなのですか？」

ふと思いついての質問に、アルポイは我に返ったように瞬きした。

「あ、ああ…。まあ…簡単に言っていると、香りの問題なんだがね」

「香り、ですか？」

アルポイの言葉に、リエナが淹れてくれた茶の事を思い出す。

豊かで芳しい、何処かでほっとするような香りだったと思う。てっきり、茶葉は淹れればどれもあのような香りがすると思っ
ていたのだが。

「そうだよ。ベネデイスの茶というのは、味より香りを重視する淹れ方だそうだね。産地によっても違うんだが、それだけじゃなくてわざわざ香りをつけたものであるんだ」

言いながらアルポイはベネデイス産の茶葉の袋から茶葉を少しづつ小皿に取り出すと、それをヴェネフへ手渡した。

視線に促され、それぞれ茶葉の香りを確かめると、確かにどれも異なる香りがした。二種類を比べるとさほど違いは感じないのだが、三種類になるとより違いがはつきりする。

意識しているからより感じ取りやすいのだろうが、正直驚いた。

「確かに……」

「なもんで、普通に淹れると香りはあるのに味が単調という、何とも不調和な状態になったり、味はしても香りと香りがぶつかり合ったりするんだ。だから素人には難しいんだよ」

「なるほど。じゃあ…味が単調なら、たとえば砂糖とかで味をつけてみれば……？」

「まあ、一般的にはそれが一番簡単だね。味の単調さならそれで多少は誤魔化せる。だが、お嬢ちゃんのあの様子だとそんな単純な方法ではなさそうだ」

「ですかね……？」

アルポイの何処となく楽しげな様子に対し、ヴェネフは益々不安になった。

マデーラがどんな妙案を持っているのかわからないが、普段の様子を考えるに、アルポイほど期待は出来そうになかった。

何しろ今まで覚えている限りでは、一度もマデーラの手料理など拝んだ事も口にした事もないのだ。

ただでさえ勝手わからぬ他人の厨房だ。うつかり薬缶やかんでも倒して火傷でもするのではないか、と心配でたまらない。一応、嫁入り前の大事なお嬢様である。

やがてマデーラが厨房から戻ってきた頃には、ヴェネフの胃は穴が空く寸前だった。

「お待たせ…って、どうしたのヴェネフ。顔色があまり良くないけど…寒いのか？」

にも関わらず、当のマデーラと言えば、胃に穴が開きそうな心労と戦い、顔色が冴えないヴェネフを一瞥いちべつしてのこの一言だ。

使用人の心、主人知らず。

流石によく出来た使用人である彼も、思わず心の底からため息をついた。

コトン、と小さな音を立てて茶器が置かれた。

アルポイとヴェネフ、そしてマデーラの三人分のそれは、寒い室内に温かそうな湯気と共に芳香を漂わせる。

「さ、どうぞ？」

軽く首を傾げながら、自信ありげにマデーラが勧める。

「どれ……。うん、血は争えないもんだね。香りが良く出ている」
カップを持ち上げ、香りを確かめると、アルポイが満足そうに目を細めた。どうやらヴェネフの心配は杞憂に終わってくれたらしい。その指に火傷などがない事をさりげなく確かめ、^{なら}倣うようにカップを持ち上げる。

(…おお…あ、暖かい……！)

ふわり、とカップから湯気が漂う。両手で触れた器の表面から熱が伝わり、無意識にその口元が僅かに緩んだ。

いくら外よりは暖かいと言えども、住居部ほど暖かさを重視されていない店内だ。

先程からじわじわと手足の先から滲んで来る寒さに辟易していたヴェネフには、暖かいというだけで非常に魅惑的な飲み物である。

思わずそのまま器に頼ずりしそうになるのを理性で耐える。

寒さに弱い事を知っているマデーラだけでなく、事情を知らないアルポイが横にいる状況でそのような事をすれば、ヴェネフが恥ずかしいだけでなく、主人であるマデーラの恥になる。

すでに着こむだけ着こんだ姿を晒しているの、今さらかもしれないが、それはそれである。

余程壊滅的な味でない限り、口にすればさぞ身体の内から温まる事だろう。想像するだけで幸せになれる。我ながら安いと思うが、本当に寒さだけはどうしようもないのだ。

けれど、すぐに口にはせずヴェネフもまず香りを楽しむ事にし

た。先程、アルポイが言っていた事を思い出したからだ。

ベネデイスの茶文化は、味よりも香りを重視している、と。

アルポイが口にする前に香りを確かめたのも、おそらくそうした事が理由だろうし、リエナからは特に言われた事はないが、そうするのが一種の作法なのかもしれない。ならばそれに従うべきだろう。よく出来た使用人には、時としてそうしたやせ我慢、もとい、自制が必要なのだ。

湯気と共に届くのは、甘く、それでいて清々しさのある果実めいた芳香。元々茶葉につけられていた香りなのかもしれないが、先程の茶葉を直接嗅いだものとはまったく違う気がする。

茶の知識などないが、確かにその香りは心地よく、かつて口にしたりリエナの淹れた茶を彷彿^{ほうふつ}とさせる。

「どう？ ヴェネフ」

マデーラの期待を込めた視線を受け止め、ヴェネフは頷いた。

「はい、よい香りだと思います。正直、お嬢様に茶が淹れられるとは思いませんでしたが、見事だと思いますよ」

ヴェネフの正直な感想に少々複雑な顔をしたものの、それが褒め言葉だった為か、マデーラは怒りはしなかった。すぐに表情を改めると挑むようにアルポイに向き直る。

「でも、問題は味よね？ アルポイさん、試してみて」

確かに今回は香りではなく味が問題だ。『素人でも簡単で、ベネデイス産の茶葉単品で美味しく飲め』なければ、意味がない。

「ああ、そうだね。では頂こう」

頷いてアルポイが器を傾けた。

まず一口含み、味を確かめるように味わう。その様子をいささか緊張した面持ちでマデーラが見つめる。自信ありげな様子だったが、多少は虚勢もあったようだ。

マデーラが手ずからいれた茶の味も気になったものの、アルポイから一体どんな感想が返ってくるのかがともかく気になり、ヴェネフも思わずじつと反応を見守った。

やがて、二人の前で最後まで飲み干したアルポイが驚いたように呟いた。

「…美味しい」

その言葉にマデーラの顔がぱつと輝いた。

「美味しい？ 本当に？ 合格？」

「…本当に驚いた。美味しいよ。ベネデイス産の茶葉独特の癖が気にならないし、微かに甘みもある。そう言えば香りも本来の物と少し違ったような…何か、入れたのかい？」

アルポイの言葉に釣られたように、ヴェネフも持ったままの茶に口をつけた。

熱いそれに舌を焼きかけながらも、含んだ途端に口内に広がったのは熱と香り、そして。

「これは……」

口を押さえて呟いたヴェネフに、マデーラがまるで悪戯でも見つかったような顔をした。

アルポイの言葉は嘘ではなく、それは確かに美味しいと言えるものだった。

普段飲みつけていないので、癖が気にならないというのは良くわからなかったものの、微かな甘みがあるのはわかる。だが、それは砂糖の類ではない。

あまりに微かで味という味ではないのでアルポイにはわからなかったようだが、ヴェネフにはそれが何かわかった。

何しろそれは彼の好物で、しかもつい先程目にしたばかりで記憶に新しいのだから。

「『冬林檎』、ですね？ お嬢様」

北方に属するスタラの冬は厳しく、国土の大半が凍りつく。その寒い時期でも一定の日照条件を有した、極限られた土地で採れる赤い果実。

それは通常の林檎より香り高く、甘みが強い。その代わり、価格的に割高。

そう、マデーラが先程、果物売りの呼び込みに引つかかった揚句に購入したものだ。

「林檎だつて？」

「あー、もう。もつと悩んでくれると思ったのに！」

予想外だったのか、目を丸くするアルポイの横で、マデーラが少し悔しげに唇を尖らせる。だがその言葉自体がヴェネフの言葉を肯定していた。

「果汁を入れたのか？ いや…それならこんなに水色が綺麗なはずがないし……」

腑に落ちないのか、アルポイがぶつぶつと呟くのに、マデーラが軽く首を傾げて問いかける。

「結局、合格つて事でいいの？ 合格なら、種明かしするけど」

心なしか確認する言葉が楽しげなのは、おそらく『合格』の自信があるからで、本当は話したくて堪らないのだろう。その程度なら表情を見ずともわかる。

それはアルポイにも伝わったのだろう。それ以前にどうやってこの茶を淹れたのか、気になって仕方がなかったのかもしれないが、アルポイはあっさりと『合格』を告げ、マデーラに種明かしを求めた。

「一体どうやってこの茶を淹れたんだい？」

「簡単な事よ。…とは言つても、わたしも母様に教えてもらった方法なんだけど」

淹れたのはマデーラでも、方法自体は自力ではないからか、少しだけ気恥ずかしそうな顔で頬を？く。

「実際に見た方が早いと思うから、ちょっと二人ともこっちに来てくれる？」

そう言つてマデーラが二人を手招きしたのは、先程までマデーラがこもっていた厨房への扉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7972d/>

仰せのままに、御主人様

2011年8月4日03時10分発行